白い幻影

シカゴ万国博覧会の記憶と文学

宮澤文雄

１．はじめに――シカゴ万博とアメリカ作家

1893 年イリノイ州で、コロンブスによる新大陸発見 400 周年を記念したシカゴ万国博覧会が開催された。会場を訪れた大衆の中にはアメリカ作家たちの姿もあった。Harriet Monroe、Julian Hawthorne、Marietta Holley、William Dean Howells、Henry Adams、Frances Hodgson Burnett、Lyman Frank Baum、Robert Herrick、Theodore Dreiser らである。彼らは、そのときの体験や印象を「創作」という形で記録・記憶している。一口に創作と言っても実に様々である。例えば、献堂式で朗読する詩作品、ガイドブック、ルポルタージュ、そして自らの訪問体験を基にして書かれた小説などがある。ほかにも作品こそないものの、Mark Twain や Hamlin Garland なども万博に関心を寄せていたし、1890 年に来日した Lafcadio Hearn（小泉八雲）は、懇意の日本人彫刻家にシカゴ万博への出品の便宜を図るなど、文学者の万博へのかかわり方は多様である。

意外にもこれまでの文学研究や万博研究は、万博と文学者の関係にほとんど関心を払ってこなかった。早いところでは Carl Smith による研究があるが、精力的に展開したのは大井浩二の『ホワイト・シティの幻影』である。報告では、大井の研究に依拠しつつ、万博体験作家の中でもセオドア・ドライサーに注目し、新聞記事、自伝、小説を取り上げながら、同万博についての記憶の変容と、記憶が想像力と結びついた場としての小説を検討した。そして最後に、その後のアメリカにおけるシカゴ万博のありようにも言及した。

２．ドライサーの万博体験

21 歳の若きドライサーはセントルイスの新聞『リパブリック』の記者として、ミズーリ州の学校教師の一団に同行し、シカゴ万博を訪れている。そして同行記者として 7 月 17 日から 22 日までの 6 日間にわたって記事を書く。記事の内容は、日程や出来事の報告が中心で、最終日になってようやく、目ぼしい記述に出合う。

まずは昼間のホワイト・シティの美しさが情感豊かな筆致で称えられ、「古代アテネの首都」のイメージに重ねられる。つづいて、ホワイト・シティの真の美しさは夜にこそあると打ち明けられると、ホワイト・シティのイメージは「神々の庭園」という次元を超えた神話的幻想にまで高められる――“The many pinnacles are capped with flaming crescents and crowns of light until the walls are brighter illuminated than by day and the shadows of the trees melt into nothingness. How the statuary gleams, silvery brightness in the glare of the lights that rest upon them! It is then that the Fair Grounds seem a garden of the gods” (“Last Day at the Fair”, *TDJ* 137). 記事は素晴らしい光景を見ることができた観客たちの興奮と幸運を語って結ばれているが、それは同時に若きドライサー自身のことでもあった。引用部に注目すると、ドライサーの反応が絶頂を迎えるのが、自然の光に包まれた昼間ではなく、テクノロジーの光が夜の闇を掻き消した瞬間だったように、ホワイト・シティへの熱狂は、自然から機械へ、地理的フロンティアから都市的フロンティアへの鮮やかな転換を狙った大衆に訴える演出の中で生み出されているからだ。最終日の記事は、記者ドライサーがシカゴ万博の壮麗さにひたすら感動する大衆の一人に過ぎなかったことを伝えている。

世紀末の不安や危機という時代の影を掻き消す力や希望を、目がくらむほどのまばゆい光のイメージで表現することが、ボームの大衆小説 *The Wonderful Wizard of Oz* (1900)の言わずと知れたエメラルド・シティの輝き、すなわち世界のすべてを緑一色に染め上げてしまう煌めく光景にも見られることを思い出したい。

３．自伝（*Newspaper Days* と *Dawn*）と小説（*Sister Carrie*）

万博からおよそ 30 年後、ドライサーは自伝 *Newspaper Days* の中で万博体験を回想する。一部の記述には、過去と現在とのあいだに埋めようのない隔たりが生じていて、強い喪失感がもたらされていることが確認できる。そのような記述には、かつて「神々の庭園」と謳ったホワイト・シティの都市的ユートピアのヴィジョンは見る影もなく潰えている。30 年後のドライサーの現実認識は、「より厳しく、より冷たく、より灰色（harder, colder, grayer）」になっていた(*ND* 310)。さらに、記者になる前の 19 歳までのことを扱ったもう一冊の自伝 *Dawn*（同書は *ND* の後に出版されたが、執筆の開始時期はそれよりも 10 年早い）の中でも都市に対する幻滅を語っている。そればかりでなく、かつての自分は都市に惑わされていたという認識も垣間見え、万博時の新聞記事からは知ることのできなかったドライサーの自己省察が自伝には記録されている。

このように各自伝で万博が回想されているにもかかわらず、ドライサーが小説では万博を描かなかったことは不思議に思われるかもしれない。ここで *A Theodore Dreiser Encyclopedia* の *Newspaper Days* の項目での興味深い記述を紹介しておくと、「*Newspaper Days* 執筆時の仮題目は、実は *A Novel about Myself* だった」こと、そして「無経験から経験、純真さから自己認識の深化へと向かっていく」自伝のプロットは小説の場合と全く同じだという(*A Theodore Dreiser Encyclopedia* 279-280)。ドライサーにとって自伝と小説は未分化で、共有するところが多いと考えられる。たしかに、1 作目の小説 *Sister Carrie* (1900)は、その書き出しから自伝を書いているのではないかと思わずにはいられないほど、自伝と小説、すなわちドライサーの記憶と想像が重なり合っている。大雑把になるが自伝と小説を分けるなら、その創作において、どちらも記憶と想像力を必要とするが、比べた時に、記憶に重きを置くのが自伝、想像力に重きを置くのが小説ということになるだろう。ただし、小説を書くように自伝を書き、自伝を書くように小説を書くドライサーの場合は、その二つのジャンルが重なり合っている点に特徴がある。

万博体験から 7 年後に出版された『シスター・キャリー』にはホワイト・シティは直接描かれないが、むしろそれゆえに、都市に対して、一方では憧れることを支持し、もう一方では幻滅を抱くことを認めるドライサーの内なる葛藤が、無名の田舎娘からブロードウェイのスターにまで登りつめるキャリーと、高級酒場の支配人からホームレスへ、果てはガス自殺にいたるジョージ・ハーストウッドの交差対照的な運命に投影されている。だが本作の後半は、ハーストウッドの物語といえるほど、ドライサーは転落するハーストウッドに執着する。最終章のハーストウッドが自殺を決意する場面では、雪が都市を覆い始める――“It was truly a wintry evening, a few days later, when his one distinct mental decision was reached. Already, at four o’clock, the sombre hue of night was thickening the air. A heavy snow was falling—a fine picking, whipping snow, borne forward by a swift wind in long, thin lines. The streets were bedded with it—six inches of cold, soft carpet, churned to a dirty brown by the crush of teams and the feet of men. . . . There were early lights in the cable cars, whose usual clatter was reduced by the mantle about the wheels. The whole city was muffled by this fast-thickening mantle” (*SC* 348-349). かつてすべてを実現可能にしてくれるかに見えた都市のまばゆい輝きは、いまや都市機能を麻痺させるばかりか、ハーストウッドの人生を奪っていく重く冷たく濁った雪に変わっている。ハーストウッドの転落を辿りながらドライサーのホワイト・シティの幻影は、「より厳しく、より冷たく、より灰色」になるばかりの輝きを失った白い雪として表出している。

４．おわりに

世紀転換期以降のアメリカ小説にも、ホワイト・シティの幻影は捉えることができる。例えば 1925 年に出版された F. Scott Fitzgerald の *The Great Gatsby* 第 5 章の冒頭では、火事だと見間違うほど煌々と明かりが灯されたギャツビー邸がホワイト・シティだと喩えられる。その明かりはギャツビーの破滅の原因であり、何かと白いものと結びつくデイジーを迎えるために行ったことだけに、この比喩は意味深長である。また、ホワイト・シティの幻影はその後も漂い続け、Erik Larson の *The Devil in the White City* (2003)をはじめ、現代のアメリカ小説にも徘徊している。さらに、ディズニーランドも、リンカーン記念堂も、海軍艦隊ホワイト・フリートも、ホワイト・シティの延長にある（能登路 14-15）。世紀転換期に突如現れては消えていったホワイト・シティは、白い影と化してアメリカ的想像力にとり憑き続けているといえよう。

主要参考文献

Dreiser, Theodore. *Dawn*. Horace Liveright, 1931.
――. *Newspaper Days: An Autobiography*. Ed. T. D. Nostwich. University of Pennsylvania Press, 1991.
――. *Sister Carrie.* 1900. Ed. Donald Pizer. Norton, 2006.
――. *Theodore Dreiser Journalism: Newspaper Writings, 1892-1895*. Ed. T. D. Nostwich. University of Pennsylvania Press, 1988.
Newlin, Keith, ed. *A Theodore Dreiser Encyclopedia*. Greenwood Press, 2003.
Smith, Carl S. *Chicago and the American Literary Imagination, 1880-1920*. University of Chicago Press, 1984.
アン・ホワイトヘッド（三村尚央訳）『記憶をめぐる人文学』彩流社, 2017 年.
大井浩二『ホワイト・シティの幻影―シカゴ万国博覧会とアメリカ的想像力―』研究社, 1993 年.
能登路雅子「世界コロンブス記念博覧会――百年後の視点から見たシカゴの夢」（別冊解説）*A History of the World’s Columbian Exposition Held in Chicago in 1893*. Ed. Rossiter Johnson. Athena Press, 2004.
三村尚央『記憶と人文学：忘却から身体・場所・もの語り、そして再構築へ』小鳥遊書房, 2021 年.